2023年12月31日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私のための主の栄光

［イザヤ書61章1～3、10～11節］

主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。
 主が恵みをお与えになる年／わたしたちの神が報復される日を告知して／嘆いている人々を慰め
 シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の樫の木と呼ばれる。

わたしは主によって喜び楽しみ／わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。主は救いの衣をわたしに着せ／恵みの晴れ着をまとわせてくださる。花婿のように輝きの冠をかぶらせ／花嫁のように宝石で飾ってくださる。
 大地が草の芽を萌えいでさせ／園が蒔かれた種を芽生えさせるように／主なる神はすべての民の前で／恵みと栄誉を芽生えさせてくださる。

[1]　今年の歩みを振り返る中で

今年最後の日を主の日として礼拝を捧げ、そして明日から新しい一年を迎えることができる事は大きな恵みですね。

私自身は今年を振り返ると、至らなかったこと、出来なかったことばかりが思い起こされて反省が多いです。川越教会の牧師としても自分は神様の前に、また教会員の皆さんとの関わりの中でどうだったのだろうか、とやはり考えさせられています。自分自身のことですが、困難を覚えることも正直ありました。しかし、私たち、それぞれ自分を振り返り、見つめ直してゆくということは大切なことだと思いますし、する必要があることだと思いますが、もっと大切なことは、神様はどんな中にあっても私たちの営みを覚えて下さり、そこにいつも恵みとゆるしを持って導いて下さったということ、その確かさを思って感謝することではないかと思います。そして、教会という所は「祈りの家」です。私たちは一人ではないということ、互いに祈り合う中で支えられていることを思います。

私たちの人生は、「何歳」というように、一年単位で数えることに慣れてしまっていますけれども、本当は、生まれた日からずっと続いている命ですよね。ですから、「私の命、今日は何万何千何百何十何日」と言える訳ですよね。当たり前ですが、命は輪切りではなく、連続しています。そうみると、私たちの存在や命は“重たい”と思います。これまでの積み重ねがそこにはありますし、私たちのどんな日々も、神様が始めて下さったその命（それは例外なく祝福された命です）の流れの中にあるんです。

[2] メシアの到来―今日、実現した。

さて、今日読むように導かれている聖書箇所は、旧約のイザヤ書の61章の所からです。この所は、メシア（救い主）到来の預言の言葉と言われます。丁度一週間前、私たちは救い主イエス様が来て下さったクリスマスを迎えました。その出来事を覚えながらこの箇所を味わえるのは良いことだぁと思いました。主の到来と私たちの日々の歩みはかけ離れたものではありませんよね。主イエス様が公の活動を始められた初めのころ、ユダヤの会堂の中で、主はこのイザヤ書61章の初めの部分を朗読し、そこに集まっている者たちに「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」(ルカ4:21)　と宣言されました。元々のイザヤ書の言葉は、イエス様誕生の500年以上前に記されたという「預言」の言葉です。あの、バビロン捕囚の辛い歴史を経験して、その後何世代も何世代もこの言葉のようなメシアの登場を祈り求めて来たけれども、この預言の言葉は、今こそ私において実現したのだよ、と言うのですね。―「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。」

「メシア」（油注がれた者）がついにやってきた！しかし、いつの時代でもそうなのでしょう、人間は強い「権力」をもって国の威信を回復してくれるリーダー、豊かな暮らしを実現してくれるリーダーを期待しますけれども、彼はそうではありませんでした。彼はいわゆる政治的な手腕で人々を助けたと言うのではなく、彼の存在そのものが神様からのメッセージ―良き知らせ―だったんです。わたしが来たからには、あなたは深いところで慰められる！あなたは、あなたをがんじがらめにしていたものから解放されるのだ！と語られたのです。それは丁度、あのクリスマスの夜に主の御使いが現れて、「あなた方のために救い主がお生まれになった」と告げられた羊飼いたちと共通していると思います。彼らはどこかで疎外感を覚えながら生きていたような存在ではなかったかと思うのですが、あなたのために私は救い主を送る、と告げたのです。神様の恵みとは、一方的に与えられるものです。クリスマスの夜、神様の栄光が羊飼いたちを包んだように、私たちの人生の中に、キリストという栄光に満ちた存在が入り込むと言われたのです。

これは内容的に同じイザヤ書の前の章、60章の預言とも重なっていると思います。60章も同じ時代に書かれた預言ですが、このように始まっています。―「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があなたの上に現れる。」

「主の栄光があなたの上に現れる」と言うのですね。この「栄光」という言葉は、原語のヘブライ語では「カーボード」という言葉で「重い」という意味があるのだそうです。この「栄光」には重さ、重量感があるのです。どういう重さでしょうか？それを私たちは、実際のイエス様の言葉から見ることが出来ます。

[3] 主の十字架の死が、私たちへの「栄光」になる

この「栄光」という言葉ですが、旧約ですとイザヤ書や詩編に多く用いられているのですけれども、新約聖書においてはヨハネによる福音書にたくさん使われています。実はイエス様ご自身もこの「栄光」という言葉をよく用いられています。それはきらびやかな言葉ではなく、深みと重さがあります。ヨハネ12：23～24にはこのように記されています。―「イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」―これは明らかにご自分の死、十字架の死を思いながら「人の子が栄光を受ける時が来た」と言っています。そしてさらにイエス様は、十字架にかかられる前日に弟子たちに決別の言葉を13章から16章まで語られましたが、その後、主は父なる神様に向かってお祈りをされました。ヨハネによる福音書17章ですが、よく「大祭司の祈り」と言われる箇所です。全部を読みたいところですが、アタマの1～5節をお読みしてみます。―「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。 」

これは驚くべき祈りだと言わなければなりません。わたしイエスはこの世が造られる前から父なる神のもとで栄光を持っていましたが、今あなたがわたしに委ねた、人の目にはその真反対、真逆にしか見えない十字架を背負う時がやってきましたと。しかし、そのことによってわたしはあなたの栄光を現します。救いを成し遂げます。どうか、子にも栄光をお与え下さいと。…これは言葉だけの祈りではなく、ご自分の命を用いる切なる祈りですね！そして、その祈りは誰のためかと言ったら、私たちのためです！罪人であり、不信仰の故にバビロン捕囚になったイスラエルに等しい私たちのためです。イザヤ書61章3節で預言されていた言葉はこう語られていました。―「シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の樫の木と呼ばれる。」

主イエスが私たちの人生の只中に入ってこられることによって何が起こったのでしょうか？嘆きの現実、暗い心の現実というものを主ご自身が受け取って下さり、その代わり私たちには灰に代えて冠を、また嘆きに代えて喜びの香油や讃美の衣を着せて下さったというのです。ご自分が持っていた神様の栄光を私たちに与え、私たちの罪をご自分が引き受けるという“交換”です。そしてそれこそ、神様の栄光だと仰っているのですね。―何と重たい栄光でしょうか。

　今日初めに、私たちの人生は積み重ねの中にある、と申しました。私たちの人生のその一日一日は神様に覚えられています。この一年間も私たち、色々なものを背負いながら、そして抱えながら生きてきました。これからも荷物がなくなる訳ではないと思います。違う荷物が与えられるかも知れない。重たいです。でもその重さは、イエス様ご自身の栄光の重さと重なり合っているのです！私たちの命は、はらはらと儚い命なのではありません、私たちは皆、既に永遠の命を与えられて生きているのです。主イエス様は、決して私たちをお見捨てになることはありません。イエス様はご自分から「時が来た」と言って十字架を担って下さったし、担って下さっているのですね。

さあ、私たちはイザヤが告げる「主が恵みをお与えになる年」を迎えようとしています。主は今朝仰っていると思います。この一年間、お疲れ様。これまでよく歩んできたね、一緒に、あなたの新しい年、「何万何千何百何十何日目」を歩みだして行こうと。私たちは、この主イエスをこそ頼り、このお方に預けながら一歩一歩進んでいって良いのですね。お祈り致します。

主なる神様、あなたは私たちに人生の一歩一歩を与え、共に歩んで下さることを感謝致します。いずこにもあなたの御足の跡があることを信じさせて下さい。新しい年、どのようなことが起ころうともあなたの真実は揺るぎません。どうか、私たちを知り尽くして下さるあなたに全く信頼して、前に進ませて下さい。この一年間を感謝致します！主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。